

## 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響

佐藤, 洋美  
宇美町立宇美東中学校

<https://doi.org/10.15017/9045>

---

出版情報：生活体験学習研究. 4, pp.35-54, 2004-01-30. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：



## 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響

佐藤 洋美

### How the Contact with Babies and Infants Effects on Junior High School Students' Image of Child Rearing

Sato Hiromi

**要旨** 学校教育の中で、中学校においては、家庭科教育の保育領域の学習として、あるいは進路学習のひとつとして、または総合学習として、乳幼児とふれあう機会が増えてきている。高等学校においても、保育や介護の体験学習が展開されている。それらの活動の中で、確かに生徒たちは教室では見せない、生き生きとした表情を見せてくれる。

しかし、それらの体験学習の目的や効果は、豊かな心の育成等といった言葉で語られることが多く、実際に生徒たちの何が変わったのかは明確になってはいない。

今回、最近増えてきた育児不安や幼児虐待の背景に、親になる前の乳幼児とのふれあいの経験の不足があると考え、若い世代の子育て体験について見直した結果、乳幼児とのふれあいの経験が親準備性の醸成をうながすということは、先行研究の一致した見解であることが明らかになった。

次に、思春期にある男女の乳幼児に対する感情は、子どもとの接触経験や親準備教育によって好転するといわれており、厚生省が行った赤ちゃんふれあい体験学習においてもその効果が認められたという報告(清水ら、2000)から、赤ちゃんふれあい体験学習が、親になる前の乳児とのふれあいの経験の不足を補うものであると考え、体験学習前後の子育てに対する意識の変化について明らかにすることを目的に調査した。

まず、少なくなっているといわれている乳幼児とのふれあいが、中学生においても減少しているのか予備調査を行い、第1研究(1)で、清水ら(2000)が行った赤ちゃんふれあい体験学習と同様の効果が、学校教育の場面で行われる乳幼児ふれあい体験学習でも認められるかどうか比較検討した。さらに第1研究(2)で体験学習以前に、すでに乳幼児との接触経験がある生徒とそうでない生徒では、子育てのイメージの変化にどのような違いがあるのか比較検討した。

その結果、中学生の乳幼児とのふれあい体験学習において、体験学習の前後で、乳幼児イメージが具体的に、親の育児責任を認識するようになったことが明らかになった。さらに、体験学習以前にすでに乳幼児とふれあい経験がある群と、経験が乏しい群では変化が異なり、乏しい群では、乳幼児イメージが具体的に、経験がある群では、親の育児責任を強く認識するような変化が認められた。

**キーワード** 中学生 乳幼児 ふれあい体験学習 親準備性 子育てイメージ

## 1. はじめに

誰もが安心して子どもを産み育てられる社会を作ろうと様々な試みが行われている一方で、虐待による乳幼児の死傷事件や虐待の相談件数の増加という現実がある。虐待の原因となる家庭状況を、児童相談所では、経済的困難、夫婦不和、母親の孤立、育児嫌悪の4つに分類している。厚生省では、育児不安の背景に、母親の育児に対する負担感や、核家族化を指摘している。

育児という行為は、先天的に組み込まれた行動ではなく、学習性のものであることから、育児不安を訴える母親や幼児虐待の背景に、若い世代の親になる以前の乳幼児との接触経験の不足があることが指摘されることも少なくない。

育児不安という状況がどのような背景があり、また親になる前の若い世代の乳幼児との接触経験について、各種の先行研究や調査報告を検討し、乳幼児とのふれあい体験学習を、接触経験の不足を補う働きをするものであると考え、中学生に乳幼児ふれあい体験学習を実施し、学習の前後に彼らの子育てのイメージがどのように変化するかを調査することを目的に研究を行った。

## 2. 育児不安をめぐって

### (1) 「子育て」の不安

新聞紙上に虐待の犠牲になり、尊い命を落とす子どもたちの記事が掲載されることが、珍しくなくなった。全国の児童相談所に寄せられる幼児虐待の相談件数は、1999年度に11631件となり、これは1990年度の調査開始時の約10倍にのぼり、その後も増加している。母親の孤立、育児嫌悪等を虐待の原因となる家庭状況として児童相談所はあげており、厚生省も平成10年版の厚生白書の中で、母親の孤立について、母親が育児に負担を感じ、核家族化によって育児に自信をもてない状況にあると指摘している。

「育児不安」という言葉は、1976年に高橋らによって最初に用いられた言葉である。その後1993年に川井らによって3歳児未満の乳幼児を持つ母親を対象に調査が行われ、育児に不安や疲労を感じる母親の存在が明らかにされた。医学においては産後のうつ症を「育児ノイローゼ」とよび、一般的には「育児不安」と同じ意味に使っている。ここでは、生後6ヶ月以内、特に

1ヶ月以内の乳児を持つ母親に育児不安が多く、長くても3歳児くらいの子どもをもつ母親が訴えるものだと解釈されている。しかし、最近では、牧野(1982)が「乳幼児をもつ母親の生活と「育児不安」という論文で、「無力感や疲労感、あるいは育児意欲の低下などの生理的現象を伴って、ある期間継続している情緒の状態」を育児不安と定義したものが一般的になっている。子どもの月齢や年齢、母親の役割というものに限定されず、子育て一般、母親自身の幸福感や充実感といった広い意味で用いられるようになっている。

「育児不安」や「育児ストレス」には諸説あるが、母親は子育てに対して肯定感と同時に、ネガティブな育児感も抱いており、育児が自分の成長であるにとらえている母親は育児ストレスが低いという戸田(2000)の報告や、子育てが全然楽しくないと答えた母親は、子どもを持つことによって自分自身が成長したと感じることがないというベネッセ(1997)の調査結果から、子育ては楽しいけれど大変だという(大変だけれど楽しい)相反する感情や場面を受容することが、育児ストレスの軽減につながると推測されている。

### (2) 動物に見る育児の学習性

松沢(2000)の「おかあさんになったアイ」という著書によると、チンパンジーの育児には、学習が必要であることがわかっている。人間の環境で飼育されたチンパンジーの場合は、2例に1例の割合で育児拒否をおこすが、野性では見られない。また、ニホンザルにおいても、人間の環境で飼育された場合、育児拒否をおこすことが河合(1969)によって報告されている。自然群のニホンザルにおいては、初産であっても上手に子育てをする。霊長類の子育てについて調査研究をしている長谷川(2000)も、育児には学習や経験が必要であると主張する。彼は、若い雌ザルが育つ家庭環境の安定が、自分の母親の子育ての観察学習につながり、それが将来の子育ての上手さに関連してくると指摘する。

### (3) 若い世代の育児体験

#### ① 昭和20年代の子どもたち

明治・大正から昭和初期頃までの農村の子育ては、村ぐるみ、家ぐるみで行われていた。子育てが、母親だけの手に委ねられていたのではなく、産みの親以外に、名付け親、乳母等といった大人が子どもの成長に

目を配っていた。家庭では、母親は労働力として農作業に出て行くため、子どもの面倒は祖父母や年長の子どもの仕事であった。ある程度の年齢になると、年下の子どもの面倒を見ることはあたりまえのことであった。親、特に母親にだけ、子育ての責任が集中していたわけではない。商家においても同様であった。子どもたちは、好む好まざるに関わらず、自然に子育て体験をしていたのである。

## ② 日本以外の子どもたちの子育て体験

近代社会の成立に伴い、産業構造が変化し、1950年代から、学卒者は会社の組織の一員として働くという形態が主流となった日本では、男は外で労働し、女は家庭を守るという形が一般的となった。その結果、核家族化が進み、子育ては母親一人の手に委ねられることになる。子守りという形での子どもの自然な子育て体験も少なくなっていった。しかし、日本以外の国においては、昭和20年代の子どもたちのように、今も子守りという自然な形で子育て体験をしている。横山(1999)の報告によると、中国・新疆ウイグルの子供たちにとっては、手伝いの中に、今も子守りがしっかりと位置付けられていることがわかる。リズワンら(1996)の報告においても、ホータンの中学生は、弟や妹の世話を家庭で決められた自分の仕事としてあげている。

先進国のカナダにおいては、13歳以上の子どもは社会教育の中で、ベビーシッターとしての資格を取得でき、彼らはベビーシッターの経験を日常的に行うことができる環境にあると、小出(1999)は著書「地域から生まれる支えあいの子育て」で紹介している。中高校生が将来的に親としての役割をよりよく発揮し、ひいては子育て能力の高い地域社会を作ることが目的として、意識的に若い世代に子育て体験ができるような環境作りがカナダでは行われているのである。

## ③ 現在の子どもたち

少子化の中で、家庭内で「きょうだい」という人間関係を経験せず、育つ子が多いため、保育園や幼稚園では、縦割り保育に取り組むところが多い。保育士を目指す人たちに、実習以前に生活の中で育児を体験したり、異世代との交流が無いために、実際に幼児を前にどのように振舞ったらよいのかわからない人があるという報告が(久世ら, 1997)ある。子どもにおいて

は、子ども体験生活研究会の1998年度による子どもの体験の国際比較によると、赤ちゃんにミルクをあげたり、小さな子どもの世話をしたといった経験は、韓国・ドイツ・アメリカ・イギリスの中で日本が最低である。文部省の1998年の報告でも、赤ちゃんのおむつをかえたり、ミルクをのませたりしたことがないという生徒が女子で71%、男子で84%にのぼることが報告されている。

若い母親世代においても、江藤らの(1999)報告によれば、我が子を得る前に乳幼児とふれあった経験を持つものの、実際に世話をしたことが乏しいことがわかる。同様に、高校生をもつ親世代や、高校生においても、世話をした経験が乏しいことが報告されている(ベネッセ, 1991)。

世話の経験からではなく、「母親語」の使用といった視点から、子育ての体験について報告されたものがある(正高, 1995)。母親の子どもへの語りかけ「母親語」には、文化に関わらず共通の特質があり、育児能力のひとつととらえられている。乳幼児期からの子ども同士の間わりや、親のきょうだいへの接し方を見聞きする体験が、将来の育児能力の発露に影響を与えると考えられ、若い世代にとって、きょうだいがいないという不自然な環境や、子育てについて前向きに捉える機会がないということが、将来的に養育者になるための素質を欠くことにつながるかもしれないと指摘されている。

## (4) 子育て体験学習における先行研究

養育者の養育経験を、母性行動の規定因のひとつに Bowlby (1969) はあげている。蘭 (1986) によると、自己の形成において役割遂行や様々な経験により、社会におけるそれぞれの役割に応じた行動のパターンや価値の内面化が行われると述べている。子育て経験の豊かさが、養育者としての行動パターンや価値の内面化を促進すると考えられる。

では、親役割を得ることはどのような変化をもたらすのであろうか。柏木ら (1994) によると、親になることによって、柔軟性、自己抑制、視野の広がり、自己の強さ、生きがいなど多岐にわたる発達が見られると報告されている。親になることの準備状態、親性や親準備性の育成といった視点に立った、保育学習の必要性を中西ら (1989) は主張し、それを受けて、中学

校・高等学校の家庭科教育が見直された。その結果、高等学校では家庭科が男女共学となり、保育学習において、卵を子どもにみたてた子育てのシュミレーション学習や(山口, 2000)、仮想カップルを生徒同士で作成し、子育てについてのロールプレイ(香川, 2000)、書籍を活用して、親になることや子育てについての授業の展開(佐藤, 2000)、実際に乳幼児にふれあう体験学習等が行われている。また、不登校生徒の学校復帰プログラムとして保育体験の報告もある(滋賀県, 2000)。平成6年度からは、厚生省によって、将来の父性や母性の涵養を目的とした「思春期における、保健・福祉体験学習」が推進され、その中において赤ちゃんふれあい事業が展開され、その効果について報告がなされたり(清水ら, 2000)、文部省の提唱により高校において保育体験学習が進められている。

#### (5) これまでの研究を見直して

発達心理学は「おとなになること」をゴールとして、児童期や青年期に焦点をあてた研究から生涯発達を視野にいれた学問へと幅が広がった。さらに「親」は、子どもにとっての「親」であり、「親」自身も変化・成長するという視点から、親役割をとることによる成人期の発達の過程が研究されることが多くなった。これまでの研究は、「おとなになること」、「親」としての発達が課題であり、人が将来的には「親になること」を視点とした「親準備性の醸成」が研究のテーマになることが少なかった。性役割感や自分の性に対する意識が変化する思春期の子どもたちを対象として、親準備性はどのように醸成されていくのかという視点が必要なのではなかろうか。

### 3. 今の子どもたちは本当に乳幼児とのふれあいが少ないのか

#### (1) 予備調査 中学生における乳幼児とのふれあい経験と乳幼児への好意

各種の報告から、年下の子ども世話をする経験が世代を追って不足していることがわかった。そこで、

今回は、県内の中学生のきょうだい状況、乳幼児への好意、乳幼児とのふれあい経験について調査し、既に報告されている子どもの体験活動等の報告と比較する。

#### (2) 方法

##### ① 調査時期および調査対象生徒

2000年6月～7月 福岡県内の中学生689名

##### ② 調査内容

質問紙は、学年、学級、性別、氏名、祖父母との同居、きょうだいの状況、きょうだい以外の異年齢の友人の状況、幼い頃の遊びの体験、乳幼児とのふれあい経験、乳幼児への好意の項目で構成した。学級活動の時間において、学級担任の監督のもとで回答した。

#### (3) 結果

##### ① 中学生689名の乳幼児に対する好意

乳幼児に対する好意は、「とても好きである」が最も多く280名であり、「まあまあ好き」の217名とあわせると、合計497名、全体の72.1%が好意を持っていることがわかった。一方「わからない」は93名で、全体の13.5%にあたる。「全く好きではない」は27名、「あまり好きではない」は72名であり、この二つをあわせると、全体の14.3%となる(表1)。乳幼児が好きであるといえる一方で、わからない生徒が一割ほど見られた。

##### ② 中学生689名の乳幼児とのふれあい経験の有無とその頻度

乳幼児とのふれあい経験を、①おむつ替え、②着替え、③ミルクをのませる、④文字や数字を教える、⑤だっこやおんぶ、⑥いっしょに遊ぶの6項目を設定した。それぞれの項目に対する体験頻度を1：全くない、2：1、2回ある、3：3～5回ある、4：6～10回ある、5：11～20回ある、6：数え切れないほどあるまで設定し選んでもらった。

経験の頻度を得点化し、経験得点とした。経験得点を6段階に分け、経験レベルとし、それぞれの度数を求めた(表2)。

全ての項目において、「全くない」と回答した経験レベル1は44名、どの項目も1、2回ほどしかない経験

表1 中学生の乳幼児に対する好意

(人数と%)

好意	わからない	全く好きではない	あまり好きではない	まあまあ好き	とても好き
度数	93(13.5)	27(3.9)	72(10.4)	217(31.5)	280(40.6)

表2 中学生の乳幼児とのふれあい経験の内容とその頻度

(人数および%)

頻度と項目	1	2	3	4	5	6
オムツ替え	509(73.9)	72(10.4)	36(5.2)	14(2.0)	21(3.0)	37(5.4)
着替え	307(44.6)	129(18.7)	77(11.2)	41(6.0)	34(4.9)	101(14.7)
ミルク	387(56.2)	120(17.4)	64(9.3)	31(4.5)	28(4.1)	59(8.6)
教える	269(39.0)	141(20.5)	100(14.5)	49(7.1)	34(4.9)	96(13.9)
だっこ等	92(13.4)	109(15.8)	92(13.4)	66(9.6)	75(10.9)	255(37.0)
遊ぶ	110(16.0)	90(13.1)	95(13.8)	72(10.4)	56(8.1)	266(38.6)

表3 中学生の乳幼児とのふれあい経験レベルの度数分布(人数及び%) 経験レベル

経験得点度	0~6	7~12	13~18	19~24	25~30	31~36
レベル	1	2	3	4	5	6
数(%)	44(6.4)	217(31.5)	201(29.2)	91(13.2)	85(12.3)	51(7.4)

レベル2は217名いた(表3)。4割ほどの生徒は、中学生になるまでに、乳幼児とのふれあいが不十分だったとことがわかる。

③ 乳幼児への好意と乳幼児との経験レベル

中学生の乳幼児への好意と乳幼児とのふれあい経験レベルを図1で表した。

乳幼児に対して好意をもっているが、経験が乏しい生徒も多い。経験レベルが高い生徒は、乳幼児に対して好意を持っている生徒が多い。

(4) 乳幼児とのふれあいの経験の内容

今回調査対象になった中学生のふれあいの経験の内容は、おんぶやだっこといった接触経験や、遊びを通してのふれあいが主で、おむつ、着替え、ミルク、文

字や数字を教えるという世話の経験は乏しい(図2)。この結果は、深谷ら(1991)の調査結果と一致する。また、どの項目にも、「全くない」と答える生徒が存在することから、子どもの生活体験活動研究会(1998)の調査結果や文部省の調査(1998)が指摘する、乳幼児とのふれあいの経験の乏しさと一致する。

4. 研究1(1) 中学生の子育てに対するイメージの変化の測定

(1) 問題と目的

平成6年度から厚生省によって行われた思春期赤ちゃんふれあい事業において、体験前後の意識の変化を調べるために用いられた質問紙を用いる。先行研究

体験レベルと乳幼児への好意 (n=689)

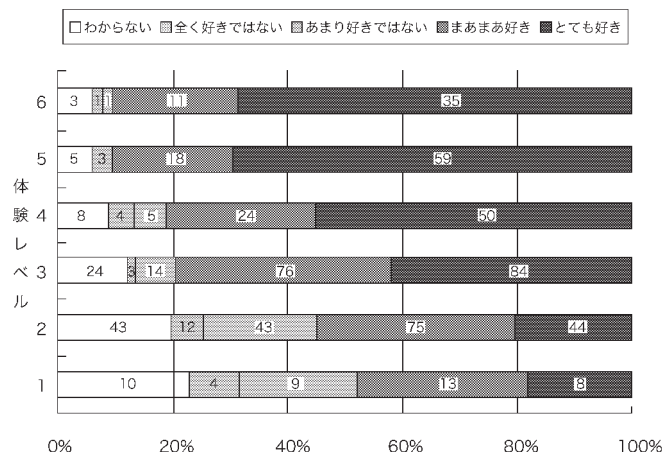


図1 乳幼児とのふれあいの経験と乳幼児への好意

## 経験の内容とその頻度 (n=689)

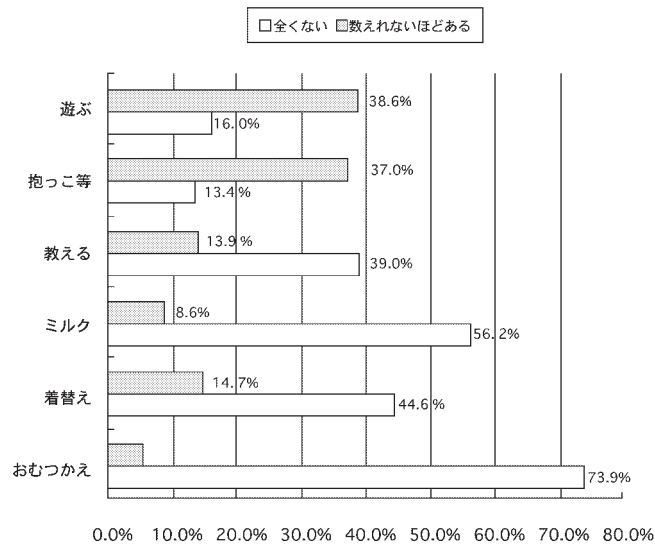


図2 乳幼児とのふれあいの経験の内容とその頻度

で報告された、中高生の乳幼児への好意やふれあい体験学習への意欲の高まり、子育てに対する否定的なイメージの減少や、肯定的なイメージの増加という効果が得られるかどうか確認する。本研究は、先行研究が用いた質問紙を改良し調査することで、乳幼児とのふれあい体験学習が与える、中学生の子育てに対するイメージの変化をより明確にすることを目的とする。

## (2) 方法

調査項目は、乳幼児イメージ・乳幼児を育てること・乳幼児を育てている父母・親が子どもを育てること・一般的な意味での「親」・乳幼児への好意及び体験学習への意欲の7項目。各項目についてSD法または5件法で回答してもらい、それらの変化を測定する。結果はSPSSを用いて解析した。

## ① 調査対象

福岡県A町立A中学校1学年生徒101名

## ② 調査方法および調査時期

先行研究において厚生省心身障害班の質問紙を改良したものをを用いる。

平成13年8月27日に乳幼児ふれあい体験学習前の意識を、平成13年9月28日の総合学習の時間に、終日乳幼児ふれあい体験学習を実施し、翌日9月29日学習後の意識を同じ質問紙を用いて調査する。事前事後とも、クラス別に学級活動の時間に同じ時間帯に教室において学級担任の指導監督のもと回答してもらった。

## ③ 調査内容

調査内容は、事前に生徒のきょうだい関係と体験学習以前の乳幼児とのふれあいの経験について(5項目)調査した。事前事後で共通の質問内容は、乳幼児イメージ(SD法20項目5件法6項目)、赤ちゃんや幼児を育てること(SD法20項目)、親が子どもを育てること(5件法4項目)、子どもを育てているお父さん・お母さん(SD法20項目)、一般的な意味での親(SD法9項目)、乳幼児とふれあうこと(5件法12項目)、乳幼児への好意(5件法1項目)、体験学習への意欲(5件法1項目)、体験学習の感想を自由に書いてもらった。

## ④ 手続き

乳幼児ふれあい体験学習に参加した生徒は101名。事前事後共に質問紙を回収できた生徒数は101名である。質問紙の回収率は100%(101名)であった。

質問に対する回答はSD法および5件法である。SD法での回答は、「とてもA」、「ややA」、「ややB」、「とてもB」といった4段階で評定してもらった。否定的な形容詞を1点、肯定的な形容詞を4点とし、1点から4点までの尺度得点とする。乳幼児ふれあい体験学習の前後において、それぞれの項目の尺度得点を算出し、平均の差の検定(t検定)を行った。5件法については「とてもA」、「ややA」、「どちらでもない」、「ややB」、「とてもB」、の5段階で評定する。「とてもA」から「とてもB」までを1点から5点までの尺度得点

とする。乳幼児ふれあい体験学習の前後において、それぞれの項目の尺度得点を算出し、平均の差の検定(t検定)を行った。

⑤ 生徒の状況

生徒の家庭内での乳幼児との接触経験をj知るために、年下のきょうだいの状況と、今までの乳幼児との接触経験について調べた。きょうだいの状況は表4のとおりである。接触経験については、一緒に遊ぶといった経験はあるものの、おむつ替えや着替えといった世話をした経験は少ないことがわかった(図3)。

⑥ 乳幼児ふれあい体験学習の概要

日時 平成13年9月28日

午前8時30分～午後3時30分

場所 町内の3幼稚園および4保育園

内容 各実習先の保育スケジュールに沿って、乳幼児と終日過ごす。

各実習先の生徒内訳は表5のとおり

(3) 結果

① 乳幼児イメージ

質問項目は ①弱いー強い、②弱弱いーたくましい、③おとなしいーやかましい、④無力なー能力がある、⑤静かなーうるさい ⑥頼りないー頼もしい、⑦強情なー素直な、⑧疲れたー元気がある、⑨生気のないー生き生きした、⑩きたないーきれいな、⑪単純なー複雑な、⑫不自由なー自由な、⑬劣っているー優れている、⑭ちいさいーおおきい、⑮不活発なー活発な、⑯小憎らしいーかわいらしい、⑰つまらないーおもしろい、⑱せせこましいーのんびりして、⑲無気力なー意欲的な、⑳わがままなー思いやりがあるの20項目。

ふれあい体験学習によって、中学生は、乳幼児に対して、たくましく、能力があり、生き生きとしていて、面白いものだという認識を強くしている(図4)。

② 赤ちゃんや幼児を育てるということ

結果は表6のとおりである。

③ 親が子どもを育てるということ

t検定の結果、全ての項目で有意差が認められた(図

表4 生徒のきょうだいの状況

(人数及び%)

弟も妹もない	弟がいる	妹がいる	弟も妹もいる	合計
41(40.8)	27(26.7)	19(18.8)	14(13.9)	101(100)

表5 実習先の生徒内訳

(人数)

実習先	幼稚園年中組	幼稚園年長組	保育園乳児	保育園幼児	合計
男子	12	12	4	27	55
女子	12	8	9	17	46
合計	24	20	13	44	101

乳幼児と接触経験 (n=101)

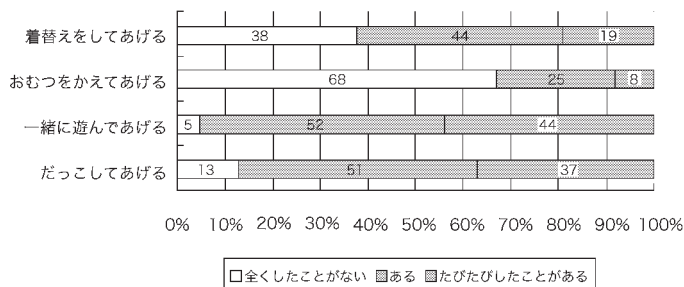


図3 生徒の乳幼児ふれあい体験学習以前の乳幼児とのふれあいの経験の状況



学習前後での乳幼児イメージの変化 (n=101 \*p<.05)

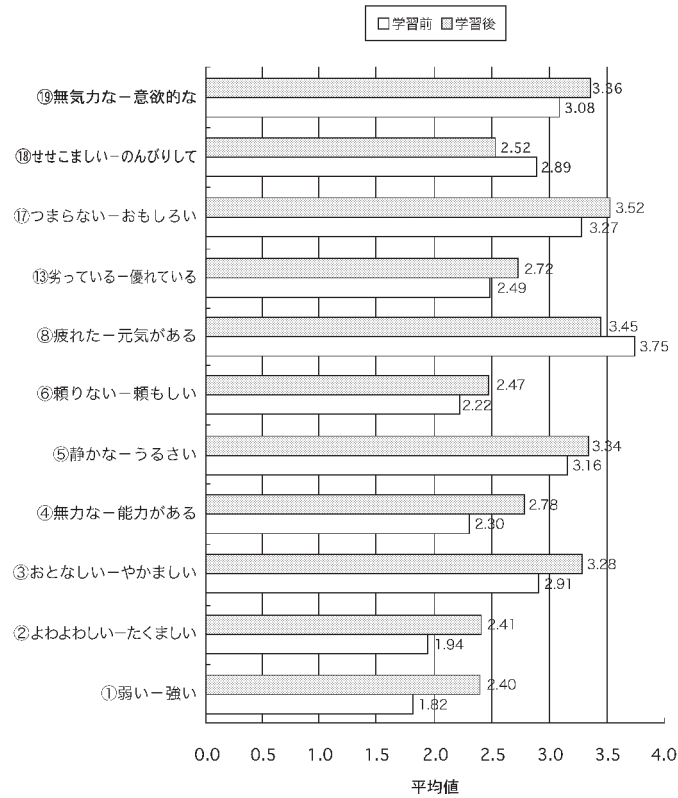


図4 乳幼児ふれあい体験学習前後での乳幼児イメージの変容

親が子どもを育てることについて (n=101 \*\*p<.01)

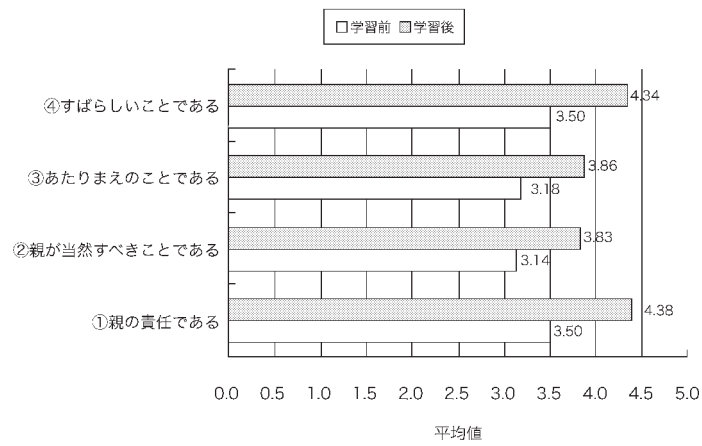


図5 親が子どもを育てることについて

表6 赤ちゃんや幼児を育てることについて乳幼児ふれあい体験学習前後の平均値と有意確率

乳幼児を育てること	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率(両側)
①難しいーやさしい	1.34	1.55	-2.134	100	0.035**
②苦しいー楽しい	2.99	3.08	-0.679	100	0.499
③不愉快なー愉快的な	3.11	3.23	-1.136	100	0.259
④感情的なー理性的な	2.73	2.54	1.568	100	0.120
⑤単純なー複雑な	3.17	3.24	-0.634	100	0.527
⑥無責任なー責任感がある	3.72	3.67	0.486	100	0.628
⑦かなしいーうれしい	3.55	3.50	0.631	100	0.530
⑧せせこましいーのんびりした	2.25	2.25	0.000	100	1.000
⑨つまらないーおもしろい	3.33	3.49	-1.665	100	0.099+
⑩ちいさいーおおきい	3.36	3.57	-1.941	100	0.055+
⑪わがままなーおもいやりがある	3.42	3.52	-0.926	100	0.357
⑫不幸なー幸福な	3.62	3.67	-0.660	100	0.511
⑬貧しいー豊かな	3.41	3.52	-1.463	100	0.146
⑭不潔なー清潔な	3.22	3.05	1.674	100	0.097+
⑮生気のないー生き生きとした	3.50	3.55	-0.547	100	0.586
⑯不自由なー自由な	2.78	2.79	-0.077	100	0.939
⑰むなしいー充実した	3.35	3.60	-2.942	100	0.004**
⑱さみしいーにぎやかな	3.75	3.77	-0.332	100	0.741
⑲退屈なー忙しい	3.59	3.69	-1.165	100	0.247
⑳疲れるー元気が出る	2.82	2.85	-0.199	100	0.843

注) +p&lt;.10, \*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01

表7-1 子育てしてる父母について乳幼児ふれあい体験学習前後の平均値と有意確率

子育てしている父母	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率(両側)
①暗いー明るい	3.68	3.68	0.000	100	1.000
②つめたいーあたたかい	3.63	3.78	-1.981	100	0.050+
③弱いー強い	3.43	3.45	-0.193	100	0.874
④静かーうるさい	2.65	2.99	-3.247	100	0.002**
⑤貧しいー豊か	3.39	3.48	-0.988	100	0.326
⑥かなしそうーうれしそう	3.67	3.70	-0.376	100	0.707
⑦つまらなそうーおもしろそう	3.46	3.51	-0.678	100	0.500
⑧頼りないー頼もしい	3.50	3.57	-0.775	100	0.440
⑨弱弱しいーたくましい	3.40	3.58	-2.095	100	0.039**
⑩不真面目ー真面目	3.20	3.37	-1.708	100	0.091+
⑪無責任なー責任感がある	3.69	3.68	0.113	100	0.910
⑫ちいさいーおおきい	3.33	3.46	-1.215	100	0.227
⑬きびしそうーやさしそう	3.38	3.38	0.000	100	1.000
⑭無気力なー意欲的な	3.45	3.43	0.212	100	0.832

表7-2 子育てしてる父母について乳幼児ふれあい体験学習前後の平均値と有意確率

子育てしている父母	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率(両側)
⑮せせこましいーのんびりした	2.63	2.44	1.330	100	0.187
⑯つかれるー元気が出る	3.08	2.88	1.259	100	0.211
⑰不幸なー幸福な	3.59	3.74	-1.827	100	0.071+
⑱生気のないーいきいきした	3.55	3.67	-1.365	100	0.175
⑲不自由なー自由な	2.91	2.79	0.948	100	0.345
⑳当然なことーありがたいこと	3.46	3.46	0.000	100	1.000

注) + $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表8 一般的な意味での「親」について乳幼児ふれあい体験学習前後の平均値と有意確率

親イメージ	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率(両側)
①うるさい	3.56	3.47	0.685	100	0.495
②わずらわしい	3.12	2.96	1.046	100	0.298
③注文が多い	3.58	3.43	0.926	100	0.357
④厳しい	3.56	3.49	0.542	100	0.589
⑤威厳がある	3.37	3.00	2.086	100	0.040*
⑥ありがたい	4.28	4.12	1.339	100	0.184
⑦たのもし	4.06	3.95	0.860	100	0.392
⑧一緒にいると楽しい	3.92	3.75	1.172	100	0.244
⑨一緒にいると安心感がある	4.04	3.94	0.660	100	0.511

注) + $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

5)。乳幼児とのふれあい体験学習前後で、子育てにおける責任について明確な意識を持つようになってい

④ 赤ちゃんや幼児を育てている父母

t 検定の結果は表7-1、7-2のとおりである。

⑤ 一般的な意味での「親」

t 検定の結果は表8のとおりである。

⑥ 乳幼児とふれあうこと

予備調査における生徒の自由記述から、頻出する言葉を選び、それについて、1) 全くそう思わない から5) とてもそう思う までの5件法で回答。t 検定の結果は表9のとおりである。

⑦ 好意および体験学習への意欲

乳幼児への好意について 1) とても嫌い から5) とても好き、学習意欲については 1) とてもしたくない から5) とてもやってみたい の5件法で回答。1点から5点までの点数に置き換え、それぞれ乳幼児への好意度得点、体験学習への意欲度得点とした。結果は表10、11のとおりである。

乳幼児への好意度得点において、学習前と学習後で平均値の差の検定を行ったところ、有意差は認められなかった。しかし意欲度得点においては、 $t = -3.31$  ( $df = 100$ ) となり、5%水準で有意であった。

(4) 考察

① 乳幼児は有能だと認識するようになったか

乳幼児に対して、強く、たくましく、やかましく、能力があり、うるさく、頼もしく、元気があり、優れていて、面白くて、せせこましくて、意欲的なものだという認識を強めている。石川(2000)は、体験前は「やかましい」が多く見られたが、体験後にはほとんどなくなり、「かわいい」や「たくましい」や「元気」が著しく増加した( $p < .01$ )という結果を得ることができ、さらに乳児との接触経験が少なかった生徒が、具体的な接触をすることで、イメージを変化させたと考察している。本研究においては、「やかましい」という項目が減少したという結果は得られなかったが、乳幼児というものは、弱い、無力な存在から、たくましく、

表9 乳幼児とふれあうことについて乳幼児ふれあい体験学習前後における平均値と有意確率

乳幼児とふれあうこと	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率 (両側検定)
③不安だ	3.25	3.23	0.102	100	0.919
④楽しいことだ	4.20	4.39	-1.326	100	0.188
⑤肉体的に疲れることだ	3.40	3.67	-1.727	100	0.087+
⑥気をつかうことだ	3.97	3.95	0.126	100	0.900
⑦おもしろいことだ	4.15	4.41	-1.880	100	0.063+
⑧自分が成長することだ	4.22	4.31	-0.667	100	0.506
⑨自分の役に立つことだ	4.26	4.33	-0.510	100	0.611
⑩将来のためにしておいたほうが いいことだ	4.40	4.50	-0.883	100	0.379
⑪気持ちが和むことだ	3.77	4.01	-1.602	100	0.112
⑫今まで気付かなかった自分に気 付くことだ	3.79	3.98	-1.139	100	0.257

注) + $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表10 乳幼児への好意度得点の平均と標準偏差

時期	好意度得点の平均	人数	標準偏差
学習前	4.37	101	0.89
学習後	4.29	101	1.06

表11 乳幼児ふれあい体験学習への意欲度得点の平均と標準偏差

時期	意欲度得点の平均	人数	標準偏差
学習前	3.99	101	1.20
学習後	4.44	101	0.89

能力をもった存在であるというイメージに変化したと考えられる。

## ② 子育ては楽しいものだと感じるようになったか

子育てはそれほど難しいものではなく、充実したものであるという認識を強めている。また、おもしろく、おおきく、不潔なことだという項目においても、有意な差の傾向が認められたことから、子育てには不潔なこともあるという現実を体験し、面白さや充実感をもつ機会になったと考えられる。

乳幼児と遊んだりした経験はあるが、世話をした経験がどの世代においても乏しいこと（江藤，1999；ベネッセ教育研究所，1991，1997；子どもの体験活動研究会，1998；文部省，1998）や、子育ての煩わしさからくる、子育ての制約感が母親に育児ストレスとして

作用する（柏木ら，1994）ことから、子育てを楽しいことだと認識するだけでなく、不潔だと認識することも、重要な経験であると考えられる。また、子どもそのものに愛情はあっても、子育てにうまく適応できないのは、「子育て」という行為に対する感情が育っていないからだという中西ら（1989）の指摘から、ネガティブな面も含みながら、全体として、充実したものであるという認識をもつことは、「子育て」という行為に対する感情を育てることになると推測される。さらに、荻津（1989）が、青年期の発達課題から親になるための資質のひとつとして挙げている子どもの世話の体験に、乳幼児ふれあい体験学習があたると考えられる。

③ 親が子どもを育てることに対する責任を強く感じるようになったか

親が子どもを育てることは、親の責任であり、当然すべきことであり、当たり前のことであり、すばらしいことであると、体験学習を通して考えるようになっている。自己の形成において、役割遂行が行動のパターンや価値体系の内面化が行われるとした蘭（1986）の主張のとおり、中学生が保育者として行動することで、親の育児責任を感じるようになったと推測される。親準備性の醸成の上から、親の育児責任について、明確に意識する機会として、乳幼児とのふれあい体験学習は意義があると考察される。

## ④ 子育てをしている父母は大変だと感じるように

なったか

子育てをしている父母は、「あたたかく」で、「真面目」で、「幸福」だという項目において、体験学習の前後で有意な差の傾向が見られた。「うるさい」という項目は1%水準、「たくましい」という項目については、5%水準で有意であった。大変さや忙しさや不自由さについて、意識の変化は認められなかった。このことから、中学生の段階では、子育て中の父母について考える機会がないため、子育ての大変さに変化はなかったと考えられる。それよりも、楽しさを味わったために、「幸福」だという認識に変化が生じ、子育てをしている父母の幸福感を意識する機会になったと考えられる。

⑤ 親に対して感謝の気持ちを強く持つようになったか

石川(2000)の報告にみられる、親に対して「うるさい」、「わずらわしい」、「注文が多い」、「厳しい」といった否定的な見方が減少し、「ありがたい」、「たのもしい」、「安心感がある」といった肯定的な認識が強くなるといった変化は、本研究では得られなかった。

実際に目の前にした乳幼児への意識が強く、親に対する認識を変化させるまでにはならなかったと考えられるが、自由記述では、感謝の気持ちを表現している生徒が多かった。

## 5. 研究1(2) 体験学習以前のふれあい経験の有無と子育てに対するイメージの変化

### (1) 問題と目的

研究1(1)では、1年生全体について、乳幼児ふれあい体験学習前後の子育てに対するイメージの変化をみてきた。石川(2000)が先行研究で確認した、乳幼児への好意が増すといった効果は認められなかったが、ふれあい体験学習に対する意欲は、強くなることが認められた。

しかし、体験学習以前に、乳幼児とのふれあい経験がある生徒と、そうでない生徒では、乳幼児に対する好意や、体験学習に対する意欲において、効果が異なるのではないかと考え、研究1(1)で得られた調査結果を見なおすことにした。

### (2) 方法

調査項目は、研究1(1)と同様の7項目。結果の分析

についてはSPSSを用いた。

研究1において得られた中学1年生101名の回答から、体験学習前に、乳幼児とのふれあい経験が乏しい生徒のものと、経験があった生徒のものを抽出し、経験が乏しい生徒のと、経験があった生徒の子育てに対するイメージの変化を比較する。

### (3) 手続き

研究1(1)における質問紙において、体験学習前の乳幼児とのふれあい経験で、①抱っこ、②一緒に遊ぶ、③おむつ替え、④着替えの4項目で調査した。それぞれの質問に対して、1)全くない 2)ある 3)たびたびあるのいずれかで回答してもらった。4項目の質問について因子分析(主因子法)により因子抽出した結果、1因子が抽出された(累積分散説明率53.863%,表12)。この因子に体験学習準備因子と名づけた。次に、各質問項目の回答を、1)全くない…1点、2)ある…2点、3)たびたびある…3点と得点化し、4項目の得点を合計したものを、体験学習準備得点とみなした。その後、体験準備得点を標準化し、パーセンタイルを求め、25パーセンタイルの生徒を準備得点低群(6点以下)、75パーセンタイルの生徒を準備得点高群(10点以上)とした。その結果、33名の生徒が準備得点低群、27名の生徒が準備得点高群に該当した。低群および高群の子育てイメージの変化を、研究1(1)と同様の手順によって調べた。

### (4) 結果

結果は検定の結果、有意差が認められたものを表記する。

- ① 乳幼児イメージ(図7, 図8)
- ② 赤ちゃんや幼児を育てること(表13)
- ③ 親が子どもを育てること(図9)

低群では①親の責任である、④すばらしいことであるの2項目において、1%水準で有意差が認められたが、高群においては①親の責任である、③あたりまえのことである、2つの項目において1%水準で、②親が当然すべきことである、④すばらしいことであるの2つの項目において5%水準で有意差が認められた。

- ④ 赤ちゃんや幼児を育てている父母(表14)
- ⑤ 一般的な意味での「親」

検定の結果、いずれの項目においても、有意差は認められなかった。

表12 ふれあい体験学習前の生徒の乳幼児との接触経験に関する因子分析の結果

	平均	標準偏差	因子
赤ちゃんや幼児を抱っこした経験がありますか	2.24	.67	.772
赤ちゃんや幼児のおむつをかえた経験がありますか	1.41	.64	.756
赤ちゃんや幼児のきがえをしてあげた経験がありますか	1.81	.73	.809
赤ちゃんや幼児と一緒に遊んだ経験がありますか	2.39	.58	.576

因子抽出法：主因子法

ふれあい体験学習準備得点度数分布表

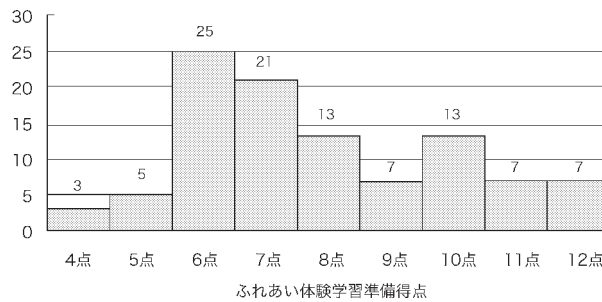


図6 乳幼児ふれあい体験学習準備得点度数分布表

乳幼児イメージ (低群 n=33 \*p<.05)

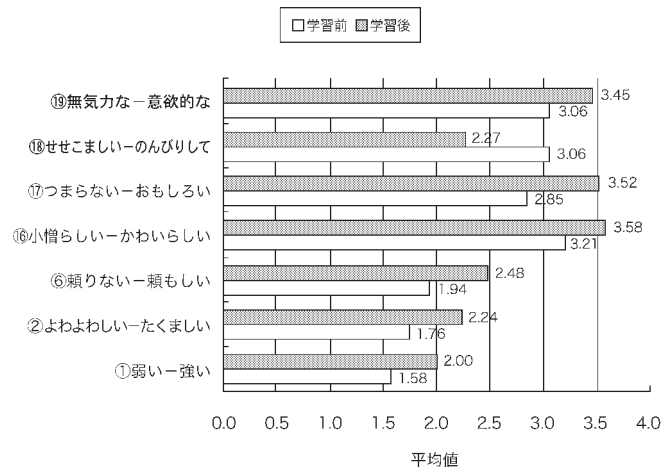


図7 準備得点低群における乳幼児イメージの変化

⑥ 乳幼児とふれあうこと (表15)

⑦ 好意および体験学習への意欲 (表16, 表17)

高群では、乳幼児への好意において、5%の水準で有意差が認められた。低群では、乳幼児ふれあい体験学習への意欲において、1%の水準で有意差が認められた。

(5) 考察

① 低群は、高群に比べて、乳幼児は有能であるという認識を持つようになったか

低群において、有意に変化した項目数が多いことか

ら、乳幼児ふれあい体験学習が、低群においては経験の少なさを補い、乳幼児のイメージをより具体的にし、彼らの有能さについて認識をもたせるようになったと考えられる。高群においては、乳幼児の有能さについて認識を強めるようになっている。

② 低群は、高群に比べて、子育ては楽しいという認識を持つようになったか

低群においては、乳幼児を育てることが、楽しく、おもしろく、充実していて、にぎやかなことだと認識するようになっている。高群においては思ったよりも

乳幼児イメージ (高群 n=27 \*p<.05)

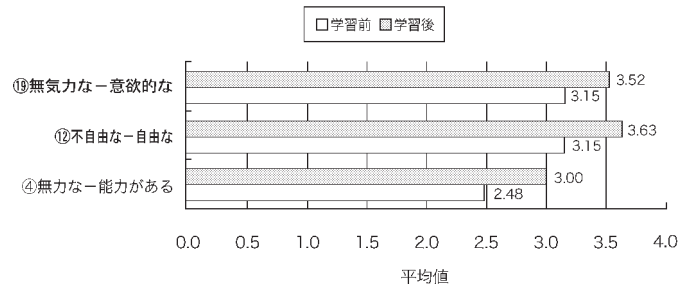


図8 準備得点高群における乳幼児イメージの変化

表13 低群および高群における乳幼児を育てることについての平均値と有意確率

乳幼児を育てること	準備得点	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率 (両側)
①難しい-やさしい	低群	1.33	1.33	0.000	32	1.000
	高群	1.30	1.78	-2.105	26	0.045
②苦しい-楽しい	低群	2.58	3.09	-2.517	32	0.017
	高群	3.30	3.19	0.473	26	0.640
⑨つまらない-おもしろい	低群	3.03	3.55	-2.781	32	0.009
	高群	3.52	3.44	0.420	26	0.678
⑰むなしい-充実した	低群	3.27	3.64	-2.334	32	0.026
	高群	3.52	3.52	0.000	26	1.000
⑱さみしい-にぎやかな	低群	3.52	3.76	-2.101	32	0.044
	高群	3.89	3.74	1.280	26	0.212

注) +p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01

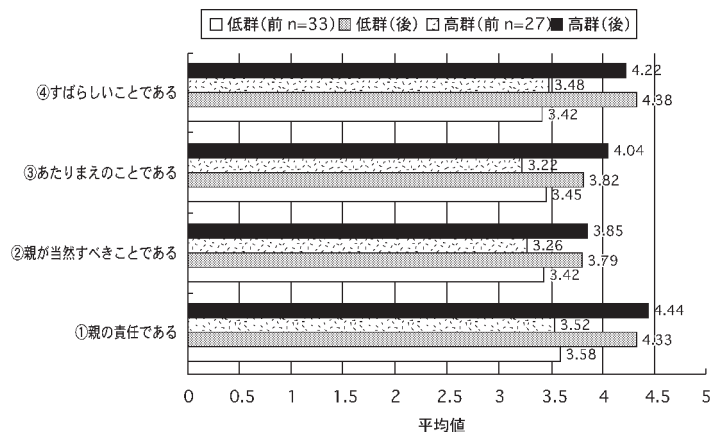


図9 親が子どもを育てることについて

表14 準備得点低群及び高群における乳幼児を育てている父母について平均値と有意確率

乳幼児を育てている父母	準備得点	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率 (両側)
②冷たい—あたたかい	低群	3.73	3.73	0.000	32	1.000
	高群	3.52	3.85	-2.208	26	0.036*
③弱い—強い	低群	3.55	3.18	1.979	32	0.056+
	高群	3.44	3.52	-0.402	26	0.691
④静か—うるさい	低群	2.64	2.97	-1.822	32	0.078+
	高群	2.67	3.00	-1.515	26	0.142

注) +p&lt;.10, \*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01

表15 準備得点低群及び高群における乳幼児とふれあうことについての平均値と有意確率

乳幼児とふれあうこと	準備得点	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率 (両側)
②いやだ	低群	2.52	1.91	2.426	32	0.021*
	高群	1.19	1.74	-2.431	26	0.022*
③不安だ	低群	3.82	3.55	0.814	32	0.422
	高群	2.63	3.33	-2.089	26	0.047*
④楽しいことだ	低群	3.61	4.30	-2.582	32	0.015*
	高群	4.70	4.41	1.354	26	0.187
⑦おもしろいことだ	低群	3.55	4.48	-3.881	32	0.000**
	高群	4.52	4.30	0.881	26	0.386
⑩将来の為にしておいたほうが いいことだ	低群	4.27	4.58	-1.437	32	0.160
	高群	4.78	4.67	1.803	26	0.083+
⑪気持ちが和むことだ	低群	3.24	3.91	-2.292	32	0.029*
	高群	4.33	4.04	1.162	26	0.256

注) +p&lt;.10, \*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01

表16 準備得点低群及び高群における乳幼児への好意の平均値と有意確率

準備得点	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率 (両側)
低群	3.79	4.21	-1.504	32	0.142
高群	4.96	4.48	2.380	26	0.025*

注) +p&lt;.10, \*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01

表17 準備得点低群及び高群における乳幼児ふれあい体験学習への意欲の平均値と有意確率

準備得点	学習前	学習後	t 値	自由度	有意確率 (両側)
低群	3.61	4.42	-3.655	32	0.001**
高群	4.44	4.44	0.000	26	1.000

注) +p&lt;.10, \*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01



やさしく、感情的なことだと認識するようになっていく。低群では、感情面での変化が見られ、高群では、子育てそのものに対する認識に変化が見られたことから、ふれあい体験学習が、低群の経験不足を補っていると推測される。

③ 低群は、高群に比べて、親の育児責任を意識するようになったか

低群では、親が子どもを育てることは、親の責任であり、すばらしいことだという認識を強くしている。それに対して、高群では、全ての項目において変化が見られ、低群よりもさらに明確に親の育児責任を意識するようになっていく。乳幼児とふれあった経験の豊かさが、親の育児責任への意識を形成する背景になると考察される。

④ 低群は、高群に比べて、子育てしている父母は大変だと意識するようになったか

低群では、子育てしている父母は、思ったほど強くはないかもしれないと思い、うるさいものだという認識は強くなった。高群は、あたたかいものだという認識を強くしている。中学生においては、ふれあい体験学習が、子どもを育てている父母についての認識を大きく変化させる効果は期待できないと推測される。

⑤ 低群は、高群に比べて、親に対して感謝の気持ちを強く持つようになったか

研究1(1)と同様に、いずれの項目にも変化は認められなかった。

⑥ 低群は、高群に比べてふれあうことについて不安が減少し、楽しさが増したか

低群では、否定的な感情の軽減よりも、肯定的な感情が強くなっている。実際にふれあいの楽しさを経験したためと考えられる。高群においては、「いやだ」、「不安だ」といった否定的な項目に変化が認められた。これは、親の育児責任を明確に意識した結果、体験学習における自分の責任を感じるようになったためと推測される。この結果から、乳幼児の世話をするのは楽しい、成長をみるのは楽しみである、子育てをすると自分の時間が減りつまらない、子どものためなら多少のことは我慢できるといった「対子育て感情」は、中学、高校、大学で有意差が認められず差も小さいといった滝山ら(1995)の指摘は、ふれあう体験を重ねることで、変化する可能性があると考えられる。

⑦ 低群は、高群に比べて、乳幼児への好意や体験学習への意欲が高まったか

低群では、好意に有意差は認められなかった。しかし、高群では好意に有意差が認められ、好意が減少した。ふれあうことについては、高群で、「いやだ」、「不安だ」といった項目に有意差が見られた。育児の素晴らしさを肯定しつつも、責任を感じるために、乳幼児に対する好意が低下したのではないかと考えられる。

一方、体験学習への意欲は、高群においては変化が認められず、低群において有意に強くなっている。乳幼児と接触した経験が乏しい低群の生徒は、具体的な乳幼児ふれあい体験学習のイメージが浮かばず、積極的に参加しようと思わなかったのではないかと推察される。変化としては傾向ではあるが、低群では、乳幼児とふれあうことが、自分の気持ちを和ませることにつながっている。この結果から、滋賀県(2000)で取り組まれている、不登校生徒の学校復帰プログラムにおける乳幼児とのふれあいが、不登校生徒の心を和ませる効果があると推測される。低群の生徒の自由記述には、「大したことをしていないのに、すごいねと言われて、とても嬉しかった。」「ありがとうといわれるたびに、嬉しい気持ちになった。」といった、乳幼児からの称賛や感謝の言葉に対して、素直に嬉しさを感じているものが複数みられた。

## (6) 結論

本研究では、学校教育の枠の中で行われる乳幼児ふれあい体験学習が、中学生の子育てに与える影響を測定した。今回は、1年生全員が総合学習の時間に町内の幼稚園や保育園でふれあい体験学習をするという形であった。しかし、先行研究の報告のように、育児や親に対する意識が肯定的なものへ変化したり、乳幼児への感情が変化したといった結果は得られず、乳幼児の有能さや、子どもを育てることの面白さ、親の育児責任について考える機会になることがわかった。

## 6. 本研究のまとめ

清水ら(2000)は、思春期の子ども達が、乳児とふれあう直前直後の彼らの子育てに対するイメージの変化を測定している。思春期の子ども達の親準備性に関する先行研究はあるが、乳児とふれあった直前直後の意識の変化についての研究はほとんどない。清水ら

(2000) が、乳児検診を体験の場として設定したのは、赤ちゃんとその保護者にふれあうことを意図したと考えられる。しかし、学校教育では、総合学習や、家庭科や特別活動において、保育園や幼稚園に生徒が出向く方法が一般的である。ふれあいの対象は乳幼児に拡大され、保育士や幼稚園教諭からの指導を受ける。親として、大人として、乳幼児にどのように接すればよいかを考える機会になると推測される。

また、清水ら (2000) は、希望して参加した中高校生を調査対象にしている。石川 (2000) は、この体験前に親に対して否定的な言葉を選んだ中高校生が、36.7%から、体験後は17.8%と減り、肯定的な言葉を選んだ割合が、43.6%から64.2%に増加したと報告している。しかし今回は、そのような変化は見られなかった。小澤ら (1997) による、ある地方都市における中学生の親に対する意識の調査では、親に対して、「頼りにしている」、「立派な人だと思う」、「ありがたいと思う」と答えた生徒は全体の70%以上にのぼり、親を頼りにし、ありがたみを感じているが、親に対して「逆らえないとは思わない」、「ただの人なんだと思う」、「自分のことを放ってほしいと思う」という回答も、40%を越え、学年が上がるほど、干渉を嫌い親に対して逆らえると思う傾向が強まると報告している (落合, 1998, Pp.98-101)。さらに、落合ら (1996) よると、親子関係は年齢によって変化し、心理的離乳に達するまでの青年期の親子関係には6種類あることを示している。それは、関わりの薄い親子に見られる「親が子と手を切る関係」、または「親が子を抱え込む関係」、次に「親が子を危険から守る関係」、そして「子が困ったときに親が支援する関係」、さらに「子が親から信頼・承認されている関係」と高まり、最後は「親が子を頼りにする関係」という発達段階的なものである。親子関係のあり方から見た、中学生の心理的離乳の過程は、親が子どもをかかえこむ関係であったり、親が子どもを危険から守る関係であるのに対して、大学生や大学院生になると、子が親から信頼・承認される関係や、親が子を頼りにする関係へと変化し、高校生は、ちょうど中学生と大学生や大学院生の移行期にあたると考えられている。この報告からも、清水らの調査対象が中高校生であり、親についての意識が肯定的なものに変化した (石川, 2000) といった結果に対しては、

中学1年生では、親子関係からみて、親に対する肯定的な見方を強めるという結果が得られなかったと考察される。

石川 (2000) は育児における親の責任について、「あたりまえ」が減少し、「すばらしい」が増加したと報告している。石川 (2000) は、「あたりまえ」という育児責任と、「すばらしい」という育児の充実感を表す言葉を、同列にして語群から選択する方法をとっている。今回は、子どもを育てることは、あたりまえであり、またすばらしいことだと考え、2つの言葉を5件法で調査した。その結果、「あたりまえ」も「すばらしい」も有意に変化した。中学生にとって、乳幼児ふれあい体験学習が、子育ての責任とすばらしさの両方を意識する機会になったと考察される。

清水ら (2000) の赤ちゃんふれあい体験学習は、地域の保健所や福祉課と連携して行われた点において注目される。今回、生徒の自由記述に、「今日、お世話した赤ちゃんが大きくなって出会うことがあったら、どんなに大切にされていたのかを話してあげたいと思います。」といったものがあつた。学校が、地域の幼稚園や保育園と協力することで、将来的に彼らが乳幼児を囲む温かな社会的環境になることが予想される。

「好き」という感情だけで乳幼児を育てることはできない。犠牲を払い、親は責任をもって子どもを養育しなくてはならない。子どもそのものに対する感情と、子育てという行為に対する感情は別のものであり、子育てや保育についての経験や知識と、保育学習に対する感情は別の資質であるということが、中西ら (1989) によって指摘されている。また、荻津 (1989) は親になるための資質として、「性的な自立」・「性役割感の確立」・「自分の親との関係」・「子どもの世話の体験」・「自己犠牲への適応」・「子どもへの思いやり」・「大人になることの認識」・「育児に関する知識」・「育児に対する態度」の9つをあげている。しかし、これらは自然の発達に任せていても青年期に育成されることはないだろう。まず、「性役割感の確立」については、親世代や教師と、産業構造が変化しつつある現在に生きる若者がもつ性役割感には、ズレはないだろうか。若者の「自分の親との関係」においても、1982年に約50万人 (厚生省, 1997)、2000年にはリクルート社の推定では約300万人といわれるフリーターの増加は、親からの

自立が進みにくいということを意味しているのではないだろうか(山田, 2001)。各調査報告の指摘どおり、高校生の親世代以降は「子どもの世話の体験」が乏しい。「自己犠牲への適応」については、子育ての制約感が母親の育児ストレスに作用するという柏木ら(1994)の指摘のとおり、子どもの世話の体験がないために、子どもの具体的なイメージがつかめず、思ったとおりに子どもが動いてくれない、育たないことが強いストレスとして働くのではないだろうか。「自己犠牲への適応」や「子どもへの思いやり」を身につけるためには、体験が必要である。子育ての煩わしさを経験する機会が、日常生活にない現在では、「かわいい」という気持ちは持てても、煩わしさを含んだ楽しさに出会い、子育てについて考える経験をするのは困難ではないかと推測される。

生徒の自由記述の中に、「きついなと思って、遊ぼうと誘われたら、元気が出てきて、いつのまにか一緒に遊んでいる自分に気がついた。」「ひとりをおんぶしていたら、次々におんぶしてほしがったので、まずいなと思った。順番にしてあげるといったけれど、わかってももらえなくて困った。何回も言うと、やっと言う事を聞いてくれてほっとした。」「笑顔を見ていたら、元気が出てきた。でも、やっぱり疲れた。」「あんなに困らせたのに、お昼寝をしている寝顔を見てると、寂しくて起きてくれないかなと思ってしまった。」「お帰りの時間が近づいてきて、正直ほっとした。でも、子どもが帰った幼稚園は静かで、さみしかった。」等の感想が出てきている。充実感や面白さと同時に大変さも経験している様子がわかる。また、保育園や幼稚園からの様々な指導事項、家庭弁当と箸の持参、髪の毛を結ぶ、つめを短く切る、笑顔で目線を低くして接する等もできていた様子が実習先のアンケートからわかった。乳幼児との生活では、大人の側が気をつけなくてはならないことが多いことが、体験学習を通して理解できたと推測される。

中学1年生の、わずか1日の乳幼児ふれあい体験学習であったが、実習前に子どもは「嫌い」、「行きたくない」と答えていた生徒が、「最近では過保護な親が増えています。そのような親は、自分の子どもだけしか、見ていないからだと思います。過保護な親は、僕達のように保育園に来て、ふれあい体験学習をしたらいい

と思います。」と感想を書いていたのは興味深い。さらに学校生活全般において消極的だった生徒が感想に、「ありがとうといわれたことが、とても嬉しかった。」と書いていた。自分が誰かの役に立つことを実感したのだろう。自尊感情にもよい働きかけをしたのではないかと推測される。

この世に生をうけて、成人し、親になり、次世代を育てることは、自然の営みである。生まれた瞬間から、緩やかに次の世代を育むものへ発達、成長し、「おとな」や「親」になっていくのである。出産を控えた両親や乳幼児を持つ父母に対しての教育や、子育ての情報誌の発行が盛んになったが、中高校生や大学生といった、親予備軍に対する教育が充実しているとはいえないと考えている。中学校という段階で、地域の保育園や幼稚園と連携し思春期の子どもたちが友人と助け合いながら取り組む乳幼児ふれあい体験学習は、親準備性の醸成を促すプログラムとして有効である。今回は、学年や実習時間の違いによる変化の差について、検討できなかったが、今後の研究の課題である。これからも、地域との連携による、親準備教育のプログラムを可能な範囲で推進していきたいと考えている。

#### 引用文献

- 1) 蘭千壽 1986 自己概念 対人行動学研究会(編) 対人行動の心理学 誠信書房 234-239.
- 2) ベネッセ教育研究所 1991 モノグラフ・高校生 '91 Vol.32 親(おや)性一人とかかわる暖かさをどう育てるかー ベネッセコーポレーション
- 3) ベネッセ教育研究所 1997 モノグラフ・小学生 ナウ Vol.17-1 母親は変わったかー若い世代のお母さんー ベネッセコーポレーション
- 4) Bowlby, J 1969 Attachment and loss. Vol.1. Attachment. Hogarth Press. (1971, Penguin Books)  
黒田実郎・岡田洋子(訳) 1976 母子関係の理論 1 愛着行動 岩波学術出版社書店
- 5) 中日新聞 2000.3.2朝刊 増える小中学生の不登校ー園児に囲まれて戻った笑顔ー滋賀県保育体験で成果
- 6) 江藤礼子・今泉岳雄他 1999 育児の悩みと母親の社会的・心理的要因の関連 第46回日本小児保健

## 学会論文集

- 7) 現代学校教育学大事典 1993 ぎょうせい
- 8) 長谷川寿一 2000 青少年問題 5月号 17-21.
- 9) Hisata, M., Miguchi, M., Senda, S., & Niwa, I. 1990 Childcare stress and postpartum depression—An examination of the stress-buffering effect of marital intimacy as social support. 社会心理学研究、6、42-61.
- 10) 今泉岳雄 2000 母親の育児不安 現代のエスプリ、408、至文堂 31-39.
- 11) 井上義明・深谷和子 1983 青年期の親準備性をめぐって 周産期医学、13、2249-2252.
- 12) 石川清美 2000 赤ちゃんふれあい体験学習の効果—アンケート調査からみた効果 小児保健研究、59(2)、159-165.
- 13) 香川実恵子 2000 男女で共に学ぶ保育の実践—バーチャル保育体験を通して— 家庭科教育、74(11)、56-62.
- 14) 柏木恵子・若松素子 1994 「親になること」による人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究、5、72-83.
- 15) 柏木恵子 2001 子どもという価値 少子化時代の女性の心理 中公新書
- 16) 川井尚他 1993 育児不安に関する基礎的検討 日本総合愛育研究所紀要30、27-39.
- 17) 河合雅雄 1969 ニホンザルの生態 河出書房新社
- 18) 子どもの体験活動研究会 1998 子どもの体験活動等に関する国際比較調査
- 19) 小出まみ 1999 地域から生まれる支えあいの子育て ひとなる書房
- 20) 厚生省監修 厚生白書(平成10年版) 1998 ぎょうせい
- 21) 厚生省監修 厚生白書(平成12年版) 2000 ぎょうせい
- 22) 久世妙子・神戸新子・笠井志紀子・針谷宏弥 1997 教育・保育実習のあり方に関する総合研究(1)—附属幼稚園実習日誌からみた学習の育ち— 松坂大学女子短期大学部論叢35、30-42.
- 23) 牧野カツ子 1980 乳幼児を持つ母親の生活とく育児不安 家庭教育研究所紀要3、34-56.
- 24) 牧野カツコ 1989 アメリカ合衆国における家庭科教育の現状—中西部の公立高校の事例を中心にお茶の水女子大学人文科学紀要、42、133-149.
- 25) 正高信夫 1995 ヒトはなぜ子育てに悩むのか 講談社現代新書
- 26) 松沢哲郎 2001 おかあさんになったアイ 講談社
- 27) 水野理恵 1998 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児の縦断研究 発達心理学研究、9、56-65.
- 28) 椋野美智子 2000 「主婦の保護」から「子育て支援」へ 現代のエスプリ、408、至文堂 58-68.
- 29) 宗像市教育委員会 1991 宗像市の小学生の生活と意識の実態 1991
- 30) 文部省 1998 子どもの体験活動等に関するアンケート調査
- 31) 中西雪雄・牧野カツコ 1989 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(第3報)—「準備状態」の構成要素と保育教育への示唆 日本家庭科教育学会誌、32(2)、61-75.
- 32) NHK放送文化研究所世論調査部(編) 1995 現代中学生・高校生の意識と生活 明治図書
- 33) 西田寛子 2000 心を育てる保育学習 家庭科教育、74(2)、28-34.
- 34) 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学44、11-22.
- 35) 落合良行 1998 中学1年生の心理 大日本図書
- 36) 荻津文子 1989 保育領域における親となるための予期的社会化に関する研究(I) 秋田大学教育学部教育研究所研究所報26、100-111.
- 37) 大日向雅美 1999 子育てと出会うとき NHK ブックス
- 38) 大塚礼子 1990 親準備性の構成要素に関する研究、東京学芸大学修士論文(未公開)
- 39) リズワン・アビリミティ・横山正幸 1996 ウィグルと日本の子どもの日常生活の比較、福岡教育大学紀要 45(4)、339-361.
- 40) 坂口りつ子 1995 保育実習の現状と課題 西南学院大学児童教育論集 21(2)、34-56.

- 41) 佐々木保行他 1982 育児ノイローゼ 有斐閣
- 42) 佐藤達哉・菅原まゆみ・戸田まり・島悟・北村俊則 1994 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究、64、409-416.
- 43) 佐藤ゆか 2000 「親になること・子どもを育てること」を考える授業 家庭科教育 74 (11)、47-55.
- 44) 青少年教育活動研究会 1995 子どもたちの自然体験、生活体験等に関する調査研究
- 45) 椎原康史 2000 群馬大学医学部保健学科椎原研究室 HP: [hppt://www.sb.gunma-u.ac.jp/~shiihara/mental](http://www.sb.gunma-u.ac.jp/~shiihara/mental)
- 46) 清水凡生 2000 赤ちゃんふれあい体験学習の効果 小児保健研究、59(2)、157-158.
- 47) 高橋種昭・中一郎 1976 母性の精神衛生に関する研究 育児不安を中心として 児童研究55(1)、53-81.
- 48) 滝山恵子・斉藤一枝 1997 中学生・高校生・大学生の親準備性の実状—秋田県における調査から— 秋田大学教育学部研究紀要 教育科学部門52、39-46.
- 49) 鑪幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社現代新書
- 50) 戸田須恵子 2000 母親の育児ストレスと幼児の気質及び養育態度との関係について 北海道教育大学紀要、50(2)、35-45.
- 51) 山田昌弘 2001 家族というリスク 勁草書房
- 52) 山口由美子 2000 卵を用いた子育てシュミレーション 現代のエスプリ、408、127-136.
- 53) 柳田國男 1963 親方子方 定本柳田國男集 15、筑摩書房
- 54) 坂柳恒夫 1992 中学生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告 16、299-308.
- 55) 横山正幸 1999 中国・新疆ウイグルの子ども達の生活について 小児保健研究 58(2)、113-121.